

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 「公共」は、人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせ、現実社会の諸課題の解決に向け、選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理を活用して、多面的・多角的に考察したり、構想したりする過程を重視する。

基礎的・基本的な概念や理論、考え方等を活用し、文章や資料を的確に読み解きながら考察する力を求める。

問題の作成に当たっては、現実社会の諸課題について理解したり考察したりするために必要な概念や知識に関わる問題、多様な資料を用いて考察する問題などを含めて検討する。

- 「倫理」は、人間としての在り方生き方についての見方・考え方を働かせ、現代の倫理的諸課題を見だし、その解決に向け、多面的・多角的に考察したり、公正に判断し構想したりする過程を重視する。

「公共」での学習などを踏まえ、倫理に関する概念や理論についての理解を深め、それらを活用して、考察する力を求める。

問題の作成に当たっては、倫理的課題の解決に向け、先哲の思想に関する原典など多様な資料や他者との対話等を手掛かりにして、批判的に吟味して思索を深めたり、様々な立場から考察したりする問題などを含めて検討する。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 『地理総合/歴史総合/公共』の「公共」第1問と同じ。

第2問 『地理総合/歴史総合/公共』の「公共」第4問と同じ。

第3問 「悪」に関する源流思想及び近現代思想についての課題探究を通して、「悪」に関連する知識の定着度、及び倫理的課題についての思考力を測ることを狙って作問した。あわせて、悪とは何かについて考えさせ、資料読解と会話による議論を通じて思考力・判断力を深めてもらうことを目標とした。第3問全体の得点率は約63%であり、他の地理歴史・公民科目と大差なかった。内訳をみると、知識を問う設問は正答率が低く、高い識別力を有していた。他方、資料を用いて読解力を問う設問は正答率が高く、識別力はやや低かった。今後も、知識を問う問題と思考力を問う問題のバランス及び難易度を維持することが必要であると思われる。

問1では、善悪と人間の関係をめぐる思想についての正確な知識を問うた。東西の思想家が混在する融合問題であったが、誤答が分散して識別率も高く、バランスの取れた問題となったと思われる。問2では、宗教共同体や近代国家における法や規範、規律をめぐる思想についての正確な知識を問うた。ルソーの全体意志と一般意志を正確に理解していない者が④を選ぶ結果となった。問3では、害悪と不正に関するソクラテスの考えが示されている資料を読み、資料の理解力と、ソクラテスの思想に関する正確な知識を問うた。識別力はあったものの、正答率は全体的に高めであった。問4では、感情と道徳の関係をめぐる西洋近現代の思想についての正確な知識を問うた。極めて高い識別力を有していたが、正答率は約46%と低く、多くの受験者がヒュームあるいはフロイトの思想を正確に理解していないことが示された。問5では、倫理的議論における意見の不一致に関するスティーヴンソンの資料を読ませ、信念の不一致と態度の不一致の違いと両者の関係についての思考力・判断力を問うた。資料の読解がキーとなる問題であり、正答率は高めになったものの、全体の難易度調整の上で効果的な設問であった。問6では、自己の内面を

めぐる思想についての正確な知識を問うた。正答率は約39%であったが、問7では、資料を基に、初期仏教と大乘仏教の思想的違いと、それに基づく悪の克服方法についての複合的な理解を問うた。誤答を選んだ受験者は、大乘仏教の空の思想について教科書記述が薄いためであろう。識別率は悪くはなかったもののやや難問であったと思われる。問8では、アーレントの公共性の哲学と、ヤスパースの実存哲学についての正確な知識と理解を問うた。正答率は約68%で、ヤスパースの「愛しながら戦う」についての理解が不十分な受験者が一定数いたと思われる。問9では、悪に関する第3問のリード文全体を素材として、思考力と正確な知識を問うた。識別率が高く、難易度も適切であったと思われる。誤答を選んだ受験者は、J. S. ミルとベンサムについての知識が正確でなかったためであろう。

第4問 「理」と「情」という一見対立するものに関する日常的な関心を導入とし、心情、感情や社会規範、価値基準をめぐる種々の議論を概観して、日本思想におけるそれらの関わり合いを、解答を通して考えてもらうことを狙いとした。

問1は、森鷗外思想に関する知識を問うた。正答率は高かったものの、文脈で解こうとした受験者もいたようである。問2は、図版も用いながら、浄土教思想について正確に理解できているかを問うた。頻出分野の鎌倉仏教から少し離れた分野からの出題であり、受験者にとっては盲点となっていたのか、正答率は低かった。また、どのような問いであれば図版を示すことが有効であるかについては、今後も検討していきたい。問3は、和辻哲郎の風土比較論についての比較的平易な知識問題であったが、知識の定着度は低かったようで、正答率はそれほど高くなかった。問4は、赤穂浪士の討ち入り事件に対する荻生徂徠の「意見書」とされるものの読解によって、近世日本における義と法の関係、ないしは儒教の性格についての理解を問うた。正答率の高さを見ると、資料の読み取りを頼りに正答にたどりついた受験者も少なくなかったようであるが、勉強を積んできた受験者にとっては、教科書知識を背景にすることで、より確実に解答できるものとなっている。問5では、教科書記述もある坂口安吾『墮落論』を読解してもらった。正答率はかなり高かったものの、解答を通して、教科書で説明される内容が、原典ではどのような文脈と内実をもって書かれているかを理解し、原典資料を読む意義を感じてもらえたであろう。全体に、資料読解を伴う形式の設問は正答率が高くなる傾向があった。第4問は、応用力を要する第5・6問とは違い、教科書知識の定着率を測ることにより重きを置くべきと考えられるため、出題形式については、さらに検討と工夫を重ねる必要があるだろう。

第5問 ブレイン・マシン・インターフェイス (BMI) を素材として、脳情報の取得に関わる神経倫理 (ニューロエシックス) について考えさせた。具体的には、感情、QOL、脳情報の収集・活用、AI の発展と異分野融合に関する倫理的・法的・社会的課題 (ELSI) の現状について出題した。また設問の背景として、脳神経倫理における最近の議論 (neurorights など) の論点などもその実意識した内容である。全体として学んだ知識を踏まえて、様々な社会問題の解決について、多面的な考え方がありうることを提示しつつ、多角的に考察し、公正に判断させることを目指した。

問1は、基本感情に関して、基本的知識を尋ねた。これは5社すべての教科書に記載がある基本的知識であり、問2への導入にもなっていた。正答率は約68%であった。知識を問う問題だからといって正答率が常に高くなるわけではないことがわかった。この誤答選択肢が選ばれやすかった背景としては、知識が不足していた解答者は、感情を常識的に“喜怒哀楽”というように感情価のみに注目して解釈していた可能性がある。問2は、感情が生じるメカニズムについて問うた。二要因理論は心拍数の増加などの身体反応を基に感情として認識に至るまでの主要な考え方である。単なるグラフの読み取りではなく、感情の生起メカニズムに関する実験研究のロジック

クを理解してこそ正答できるという点が特徴的であった。正答率は低かったが、成績上位層とその他を識別できていた。興味深いのは、解答の鍵となる条件の値が低いグラフ（正答選択肢）よりも、その値が高いグラフ（誤答選択肢）のほうが誤って選ばれやすかった点である。これは正答＝高い値というヒューリスティックに誘導されていた可能性がある。このような、仮説とその検証データから結論を導き出す考え方は認知心理学や感情心理学に限らず、科学一般に通底する手法である。そのため、選択科目にかかわらず、こうしたアプローチに多くの人々が慣れてゆくとことが日本の科学リテラシーを高めてゆくことになると考えられる。問3はAIが異分野と融合して持ちうる広範な影響の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）について尋ねた。この問の正答率は約46%で、識別力は高く、適切な選択肢構成であったといえる。問4は重要概念でありながら、倫理ではこれまで2回しか出題されていないQOL（かつ2回ともSOLと対比させて出題されている）についてBMIと関連させて、基本的な知識についての理解を尋ねた。この問の識別力は充分であった。正答率も約73%と高めであった。問5は先端科学技術（ここでは脳の情報の収集・活用）の倫理的・法的・社会的課題について、批判的に考察し、判断する力を問う出題であった。問題の形式は一見複雑に見えるが、正答率は約88%と高かった。

第6問 教科書で異文化理解との関連で学習する「共生」が、人と人の関係だけでなく、人間と自然・環境との関係にも当てはまることに気づかせ、共生という課題と環境問題に関する学びを結びつけて、環境問題への倫理的対応及びそこにおける人間の責任について考えさせることを狙いとした。それに基づき、生徒が道路拡張のための樹木伐採という身近な状況に対する疑問から自然との共生へと思考を深める場面を設定し、人間と自然との共生について、先人の倫理・思想を手掛かりとしながら、気候変動や公害といったトピックを通して現代に生きる人間の課題を多面的・多角的に考察し、公正に判断して構想できるかを問う内容とした。

第6問はどの問も、教科書で学習する知識の活用を必要とし、そのうちの三つ（問3～5）は、知識と資料等読解を組み合わせた内容であった。全体的に識別力を明確に有し、学習の成果を測るという目的は果たしている。正答率のばらつきはあるものの、第6問の得点率は約60%であり、標準的な難易度であった。識別力は、問2を除き、極めて明確にみられた。問2は、正確な知識があれば間違いであることが明らかに分かるものであり、自然の搾取に関する現代思想の正確な知識を問うという目的は達成されている。また、実質的に二択問題となった問いが二つあったが（問1と問5）、ノージックに代表されるリバタリアニズムに関する正確な知識を問う問1に関しては、四つの選択肢の前半部分が同じ内容のもの二つが選ばれており、しかも識別力が明確にみられるので、知識問題として問題なく成立している。問5は、人と自然の共生が両者の同等かつ互恵的な関係を前提とすることを、日本（水俣）を事例にして、レオポルドの「土地倫理」思想と照らして発展的に推察させる内容であった。実質的に二択問題となったのは、イに入る記述（レオポルド「土地倫理」の内容）に関して受験者に迷いがなかったためと考えられ、その点で知識力を問うという目的は果たされている。空欄ア、イ、ウに入る記述の組合せの選択に関しては、明らかな識別力が認められ、第6問全体のテーマである自然共生について総合的に問うという問6の狙いは達成されている。

### 3 自己評価及び出題に対する反響・意見についての見解

第1問と第2問については、『地理総合/歴史総合/公共』の「公共」部分を参照。

今回は新課程学習指導要領に沿った2年目の作問であり、教科書で学ぶ基礎的な知識を問いながら、同時に読解力、思考力、判断力を問うことによって、受験者が主体的に課題を発見し、広く深く考えることができるような問題となっているかどうか、とりわけ倫理問題の真価が問われ

たといってよいが，外部評価は全体的に高く，好意的であった。具体的には，出題範囲のバランスが取れ，資料を用いた設問でも，授業や教科書での学習内容と関連が深いものが選択されており，表現を分かりやすくして提示するといった工夫がみられた，これからの受験者に，基本重視の堅実な学習を促す大問であった，会話文の趣旨の読み取りに加え，基礎知識の定着も合わせて総合的に考えさせる形式になっており，大問のまとめとして適した設問であった等の評価である。こうした評価が高等学校側等から得られたことは，作問の方向性の適切さを確証するものであろう。

#### 4 まとめ

第1問と第2問については、『地理総合/歴史総合/公共』の「公共」部分を参照。

外部からの好意的な高評価が示すように，全体としてまずまずの出来具合の作問であったが，他面少なからず要望もあった。それを踏まえて，今後は方向性のさらなる彫琢を図る必要がある。大問のテーマとの関連づけをより明確にし，(教科書記載を問わず)原典等の資料を積極的に取り上げて，倫理的な見方・考え方を組み合わせた，やりがいのある意欲的な設問，読解力や常識のみで解けるものや，逆に設問の内容の理解自体が困難なものも散見されるといった，難易度のばらつきを避け，受験者が高等学校の授業や教科書で身につけた知識をベースに，思考力・判断力を発揮することで解答可能な作問が求められることはいままでもない。心理学と現代の諸課題のみで大問2問，32点が配されているのは，現状に沿っていないといった，教科書での取り扱いが少ない分野の配点の比重に関する問題提起は，高等学校の学習現場や，教科書の学習内容を適切に学んだ受験者への配慮という点からも検討すべき，問題構成上の根本的な課題であろう。